

研究の栞

日本古建築研究の栞 (第二十回)

工學博士 天 沼 俊 一

第三十 扉 (上)

『三才圖會』

以竹及葦編門曰扇今云以木曰扉又雙者曰闔單者曰扇又云一扇門爲戶又云內曰戶外曰門門扇上鑲鈕曰扇：
……

或曰凡造門戶如一扇開之可用左要右空手拒敵也如寺庵可右啓左持念珠座具可以防魔云云

『言海』

扉、(戸片ノ義)開戸ノ戸

ひらきごと、開戸、舞戸。樞クル又ハ蝶番ニテ開閉

『工業字解』

スル戸。(引戸ニ對ス)

開戸○舞戸○折戸○觀音開 ○開戸ハ樞クル又ハ蝶番ニテ吊リ込ミ内外ニ啓閉スベク作レルナリ之ヲ舞戸トモ曰フ英語 Hinged door ひんじど、
ごーあト曰フ扉ノ半ニ蝶番ヲ付テ半ヲ開戸ニシタルヲ折戸ト曰フ韓國ニ此製多シ又戸口ノ兩旁ニ一枚宛ノ扉ヲ吊込ミ中央ニテ密合スル様ニ作リタルヲ觀音開トイフ

『日本建築字彙』

とびら(扉) 開戸又ハ門ノ戸。(英)Door leaf 佛
Bantant 獨 Thürlingel)

とあり、尙「からど」の欄には棧唐戸の圖を挿入し、
其説明に次の如くある

からど(唐戸) 框、棧及ビ入子板ナドヨリ成ル

戸ナリ。(英)Panelled door 獨 Gestemnte Thür)

圖ハ唐戸ニシテ其框ハ總テ戸ノ周圍ニアル木ナ

リ其堅ナルヲ「堅框」トイヒ上ノヲ「上框」下ノヲ

「下框」トイフ。又框ノ内方ニアル木ヲ凡テ棧ト

稱ス其中央ニアル堅ナル棧ヲ「中堅棧」トイヒ横

ナル棧ヲ都テ「中棧」トイフ、中棧ノ中腰部ニア

ルモノヲ「帯棧」トイフ。又其間ニアル板ヲ「入

子板」又ハ「綿板」ト稱ス。其平滑ナルモノハ「鏡

板」ナル別名アリ云云

右のうち建築字彙のが最も詳細に説明をしてあ
る、但しこの圖は略しておく代りに、次號に一々
名稱を書き入れた圖を入れるから、夫れをみれば

判る筈である。またこれによると、唐戸といふの
を框や棧や入子板などから出来てゐる戸としてあ
つて、一枚の平たい形の所謂「板唐戸」は入れてな
いやうであるが、私は板唐戸も扉であるから兩方
をひきくるめ、扉として定義をつくつてみてはご
うかと思ふ、そこで試みに左の様にしてみたので
ある。

出入口に吊込みたる板。吊元又は吊元框の上

下に柄を造り出し、この柄は

(一) 上は上長押下端、下は下(又は)長押上端

(二) 上は幣軸下端、下同

(三) 上は長押(又は)冠木)下端 下は唐居敷上端

(四) 上は藁座下端 下も亦藁座上端

(五) 或はこれ等の適當なる配合

の孔に入り、其柄を軸として自由に開閉し得る
ものをいふ。或は吊元又は吊元框に柄を造り出
さずして、蝶番又は肱壺を用ふる場合もある、

社寺建築に於いては、前者は兩折の場合に扉と扉との間に、飾金具兼用とし、後者は殆んど用ひぬ(但し廟建築には)。
(間々用ひらる)

ではどうであらうか。長たらしいが止むを得ぬ。あらゆる場合を網羅しやうと思へばもつと長くなるが、これでも大分遠慮しておいたのである。尙ほこゝにかいてある術語は、挿入圖版を仔細にみれば皆記入してある筈だから自然に判る、若しぬけてゐても、追々説明していくうちに明らかになつてくることと思ふ。

(一) 扉の様式の分類。

(イ) 板唐戸

(ロ) 棧唐戸

の二種類がある。このうち板唐戸には

(1) 一枚板。

(2) 数枚の板を接いだもの。

(3) 数枚の板を接ぎ合せ、裏に適當の間隔に横

棧を打つたもの。

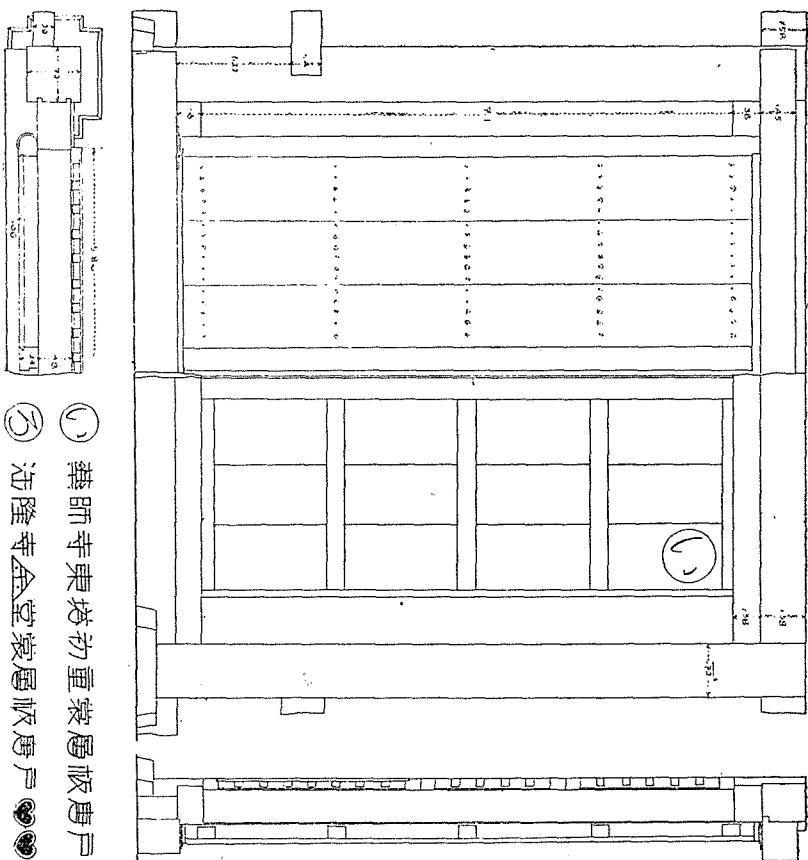
(4) 心に棧を入れ、兩面から薄い板を打ちつけたもの。

等があり、さうしてその表面には、金銅飾金具(又はさう見)を何列何行かに規則正しく打つたり、或は「八双金物」や「散八双」(何れも後出)を打つたり、又は双方の併用をしてゐる。

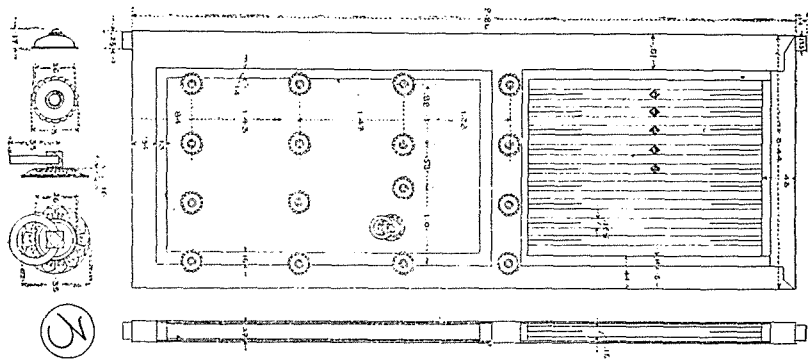
棧唐戸といふのは、曩に記した建築宇彙の説明の通りのもので、上下左右は夫れ夫れ框にて限られ、間に棧を入れて骨組を造り、其骨組の間に板を入れたもの。叮嚀なものになると、其棧の辻には飾として辻金物を打ち、棧や框には蒔繪を施し、入子板には麻の葉や雷紋等を彫り、其上に唐草模様などを彫刻して取りつけた様な甚だ込み入つたものもある。

(二) 開きの方向による分類。

(イ) 外開。



① 華師寺東塔初重装屢板唐戸
 ② 法隆寺金堂装屢板唐戸



第五十九圖 奈良時代板唐戸三種 大正十四年十月 十石五郎 吹鳴

(ロ) 内開。

の二つであるが、別に説明の必要を認めぬ。

(三) 開き方による分類。

(イ) 片開。

(ロ) 兩開。

(ハ) 兩折兩開。

(イ)・(ロ)はこれまた説明はいらぬが、(ハ)はさう行かない。(ハ)は「モロオリッヤウヒラキ」と訓む。

これは兩方へ開くのであるが、片方の扉が一度開いてもう一度開くので、即ち *Folding door* である。ところが其開き方にまた二種類ある。即ち

(1) 初めに外方に開き、更に再び外方に開く。

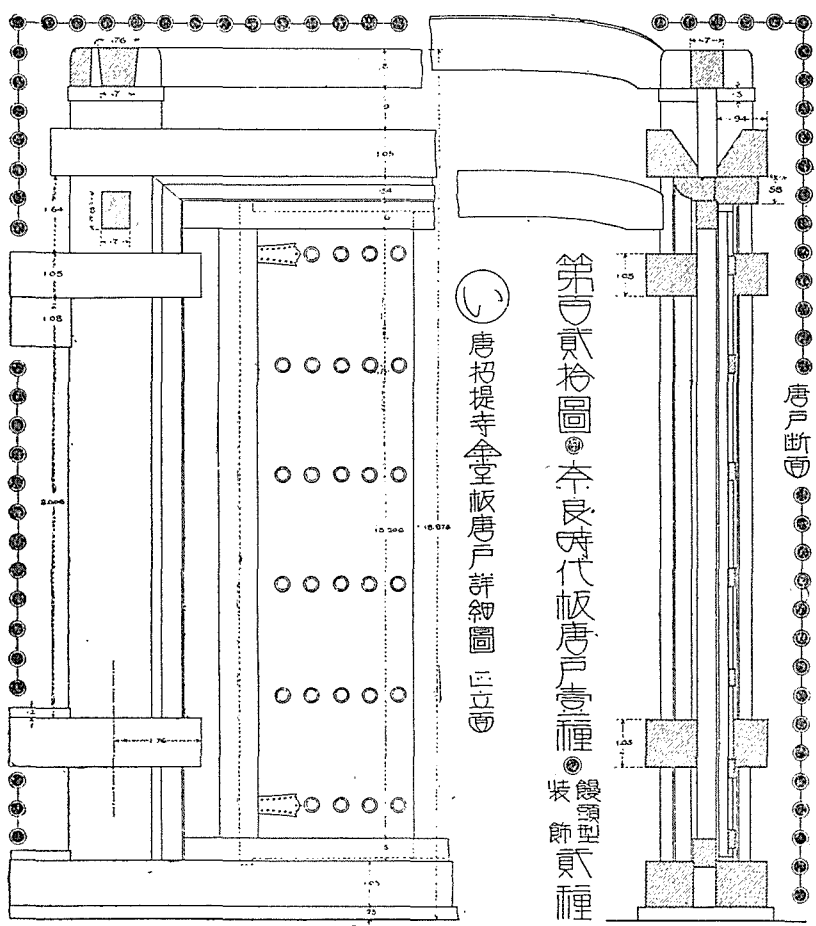
(2) 初めに内方に開き、次に外方に開く。

ので、(1)は主として方立(ハカ)の巾の廣いとき、(2)は其狭い時に用ひらるゝ様である。なせなら其方が都合がいゝからで、最初に内へ開かうが外へ開かうが結局同じ事である。たゞ方立の廣いか狭い

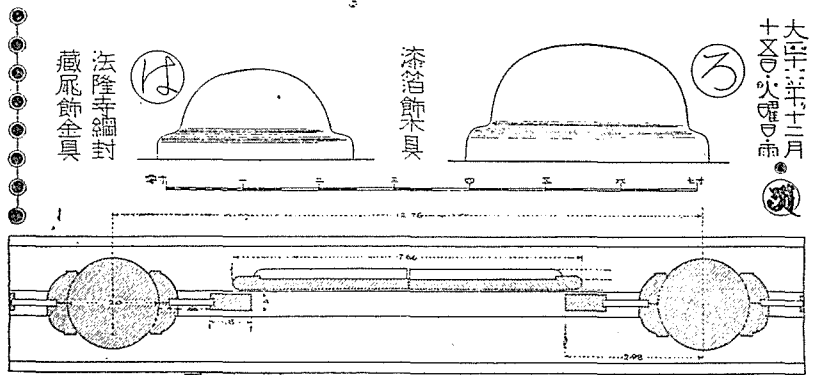
かによりて、(1)の方が便利であつたり、(2)の方が都合がよかつたりするのである。方立の廣狭は出入口の内法巾(Clear space)によるので、つまりは柱間の廣狭と外觀とに原因するのである。

『工業字解』の扉の説明の終りの方の「觀音開」の定義はよく解らぬ。戸口の兩旁に吊込んだ扉が中央で合ふ様になつてゐるとあるのは、即ち「兩開」のことらしい。併し普通俗間では「兩開」と「兩折兩開」との區別をつけないから、兩方共、とにかく兩方へ開くのを、いづれでもかまはないで「觀音開」と呼んでゐるらしい。此れは觀音像を安置してある厨子の扉が斯様になつてゐるからであらうが、ほんどうの俗名である。この筆法でいくと觀音の代りに釋迦や文殊がまつてあつたならば、其度毎に「釋迦開」だの「文殊開」だのと呼ばねばならぬであらう。『言海』には觀音開きのところに

〔觀音ノ厨子ノ制ニ起ルカ〕兩片ノ開戸ノ中央



第貳拾圖 奈良時代板唐戸壹種
 饅頭型裝飾貳種
 唐招提寺金堂板唐戸詳細圖 三立面



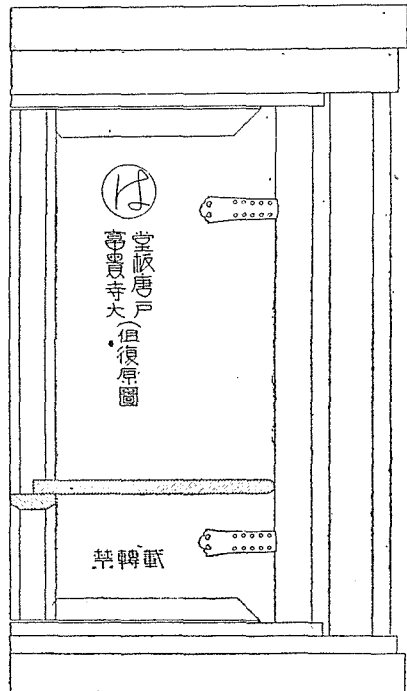
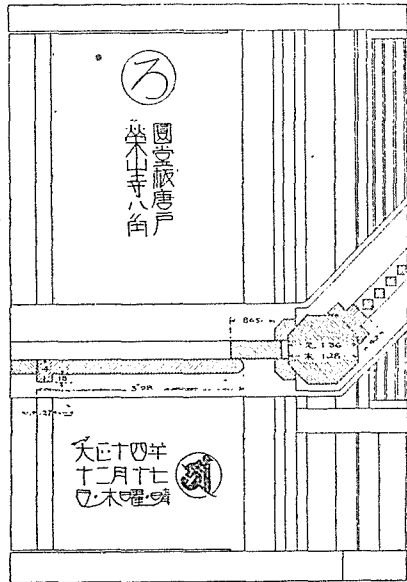
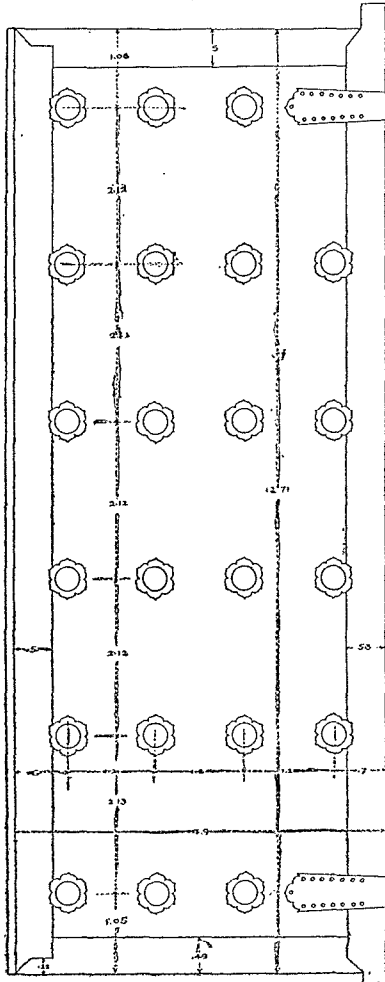
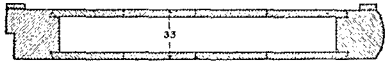
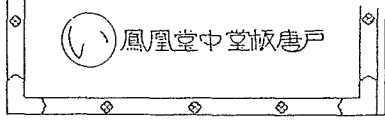
法隆寺細封
 藏扉飾金具

漆造飾木具

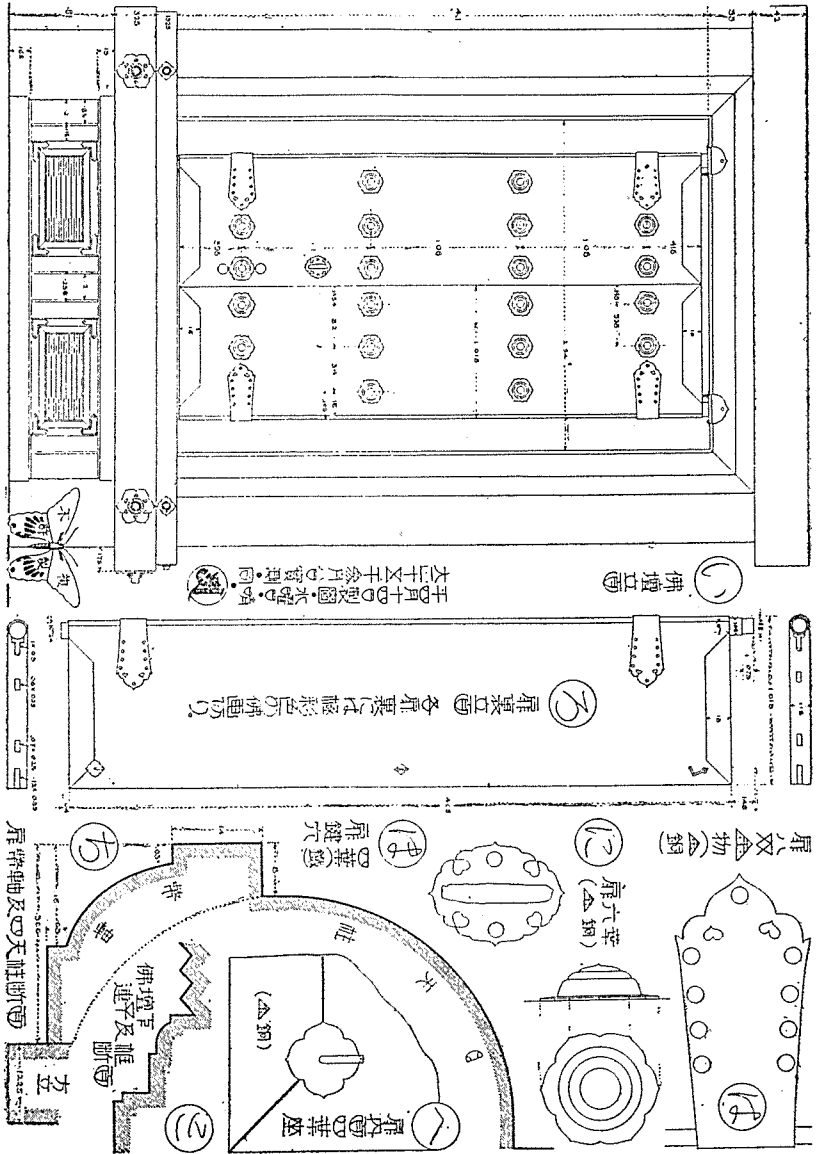
大正十一年十二月
 十八日 火曜日 雨



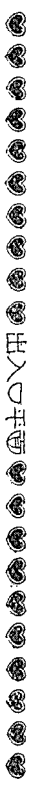
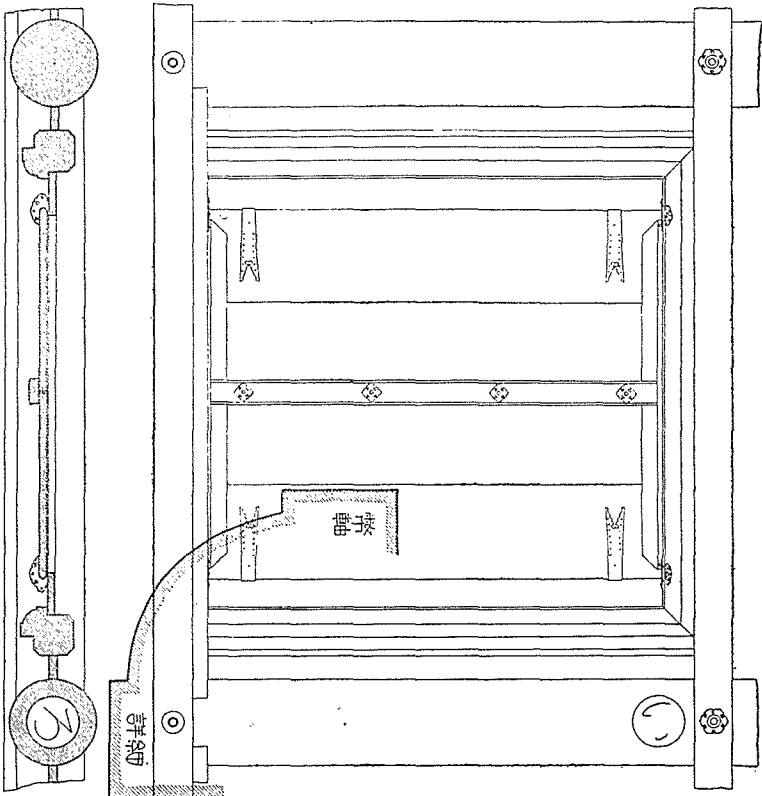
第百貳拾壹圖
奈良平安時代板唐戸參種



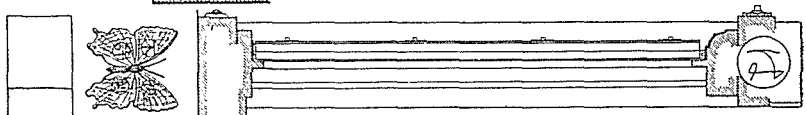
第百九拾貳圖・海住山寺之重増初重佛壇及扉之圖



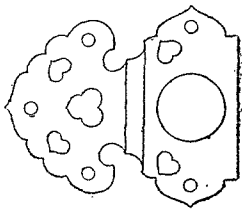
築門敷於參圖●鎌倉時代板門三種
 正に敷窓五等の板門
 板門外に五等の板門



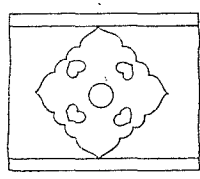
第十一卷 研究の葉 日本古建築研究の葉



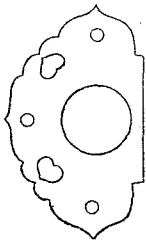
透る形、如何とせは壁面(鑿)の穴に於ては、此の形を鑿すべし。
 此れ等の鑿は、その壁の穴に於ては、此の形を鑿すべし。其の鑿の由縁也。



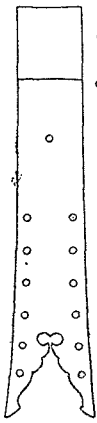
板扉軸用鉄具(上)



板扉軸用鉄具(下)



扉の、双鉄物

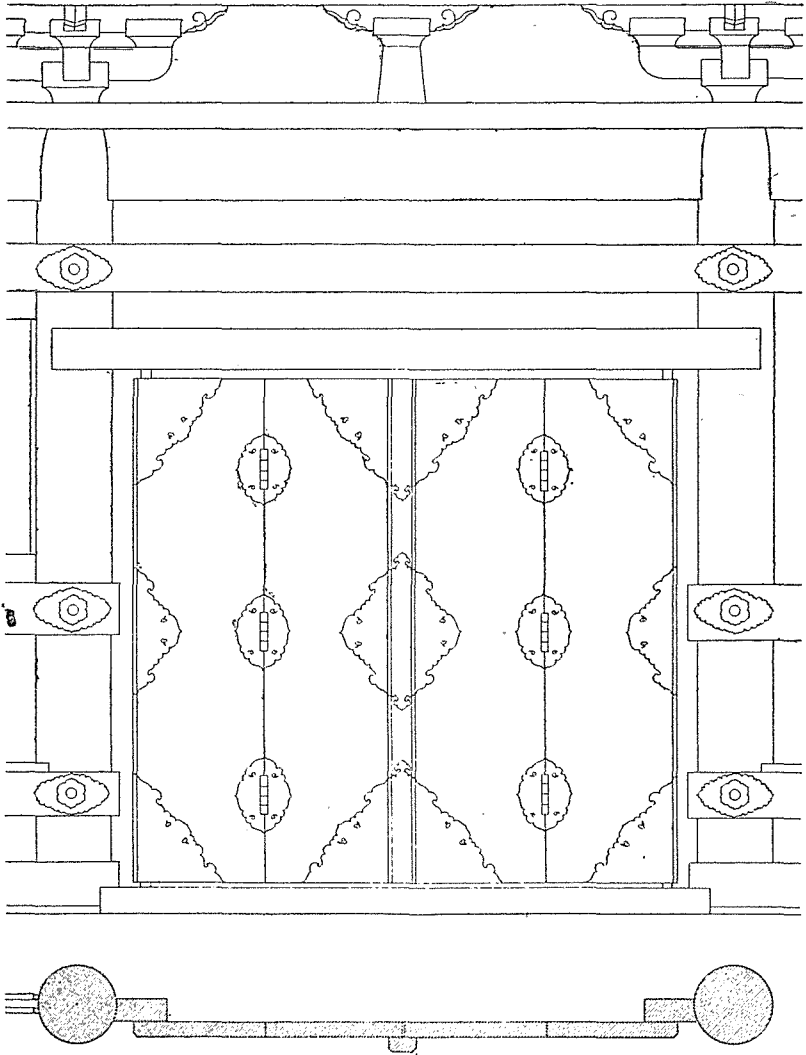


第四號 一〇七 (六一一)

第四百廿四圖

日光東照宮西廻廊兩折兩開板扉圖

大正十三年七月・製圖・大窪・晴



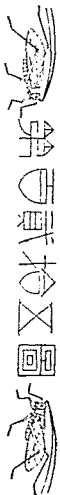
第十一卷

研究の栞

日本古建築研究の栞

第四號

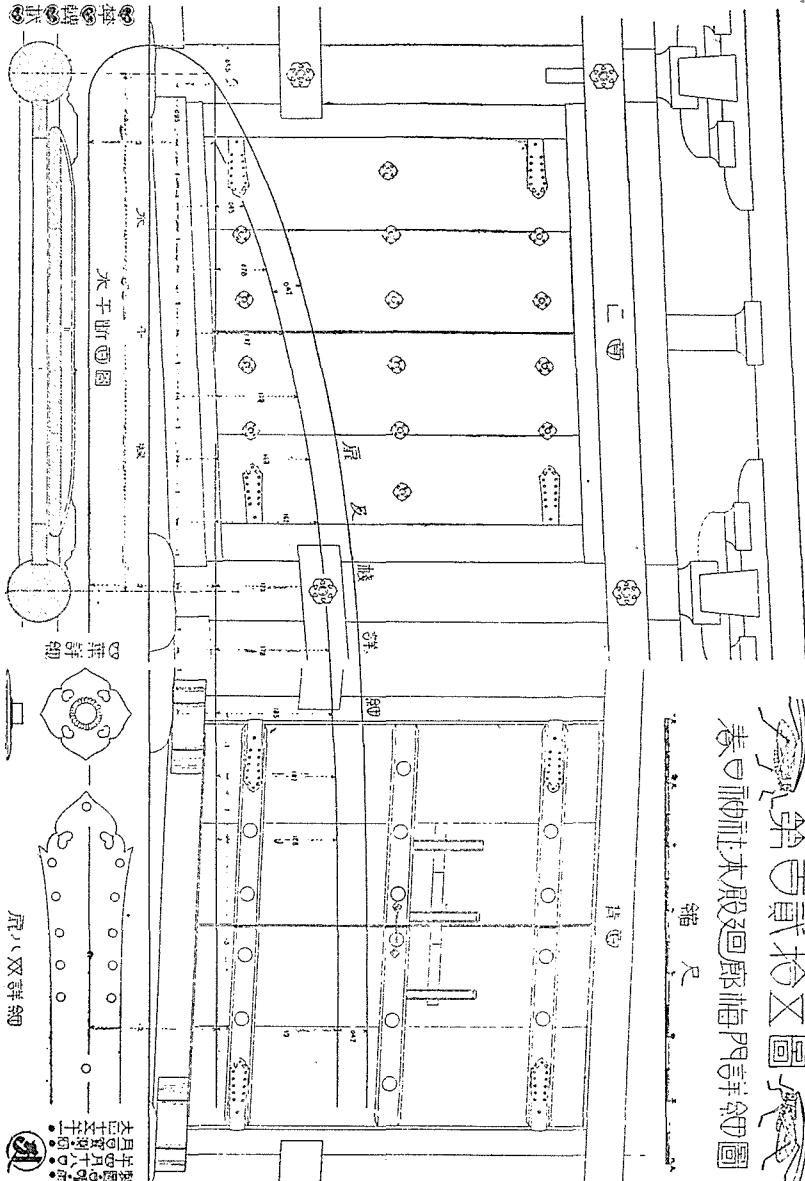
一〇八(六一二)



素の棟切区圖

縮尺

片也



ニテ合ヒ、左右へ開クベク作レルモノ。

といふ定義を下してある。洵に適當な説明で全然賛成をする。かゝる名稱は建築上の術語としては通用せぬ。建築字彙にこの名が載つてゐぬのは當然である。

* * * * *

要するに扉は、出入口にたてゝある四角な平たい板に過ぎぬ、さうして出入に際して夫れをあげたりしめたりする丈けのものである。板唐戸であらうと棧唐戸であらうと廣い意味に於いては同じもので、其形に三角や圓いのゝある筈はない。併し一概にさういつて了ふことは出来ない、時代によりそこに大分の差があるのである。先づ第一に板唐戸と棧唐戸とは、同じ扉でも外觀に相當の差があるのみならず、此の二種は同時に出來たのではない。前者は飛鳥時代からあるが、後者は鎌倉時代からである。

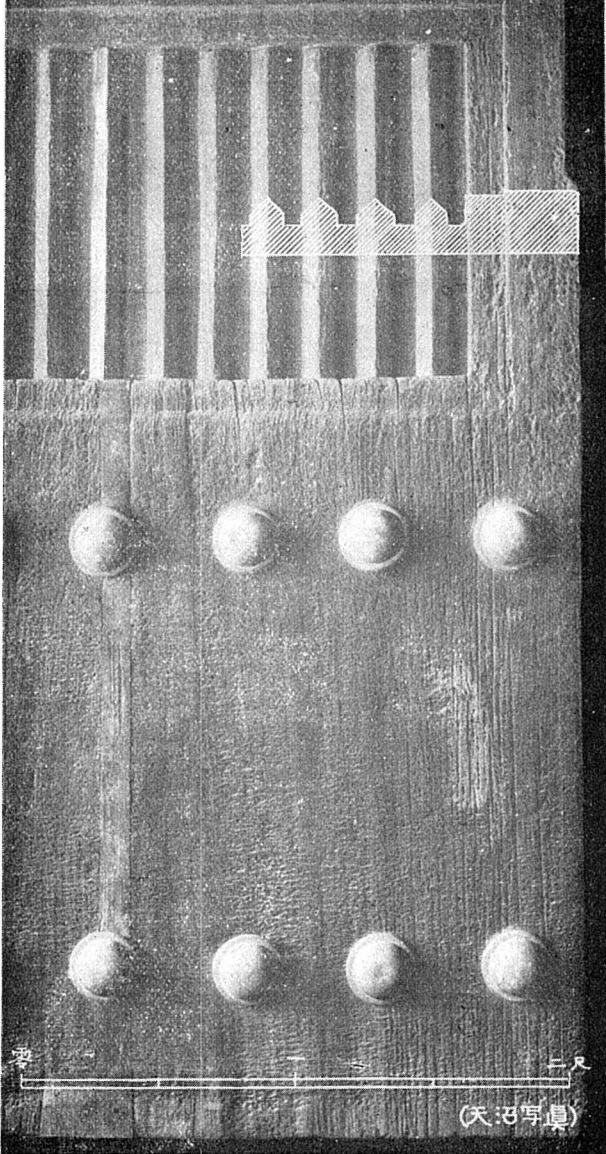
前例によると、飛鳥時代から順に各時代の實例を擧げて記載するのであるが、此度は便宜に従ひ先づ以て板唐戸に就き、飛鳥より江戸迄の變遷を記し、次に鎌倉より現今に至る棧唐戸に就て述べることにする。

(イ) 板唐戸。

飛鳥時代。

此の時代の様式をもつた扉は、法隆寺の同時代の建造物に残つてゐる丈けである。例へば金堂や五重塔等の扉が夫れであり、塔婆のは高 $8.9 \times 巾2.79$ × 厚 3.35 、金堂のは高約 $8.0 \times 巾2.7 \times 厚0.28$ 乃至 3.1 ある。さうして此れ等は材料が總て檜無節で、上下共切り放しの一枚板である。充分乾燥させてから扉につくつたと見えて、反つたり曲つたりする様な狂ひは全くない。由是觀之、當時は材料が豊富であつたのみならず、一枚の扉を製作するにも如何に入念にしたかといふ事が判るであらう。此の時代

第百廿六圖・法隆寺經藏扉壹部



第十一卷

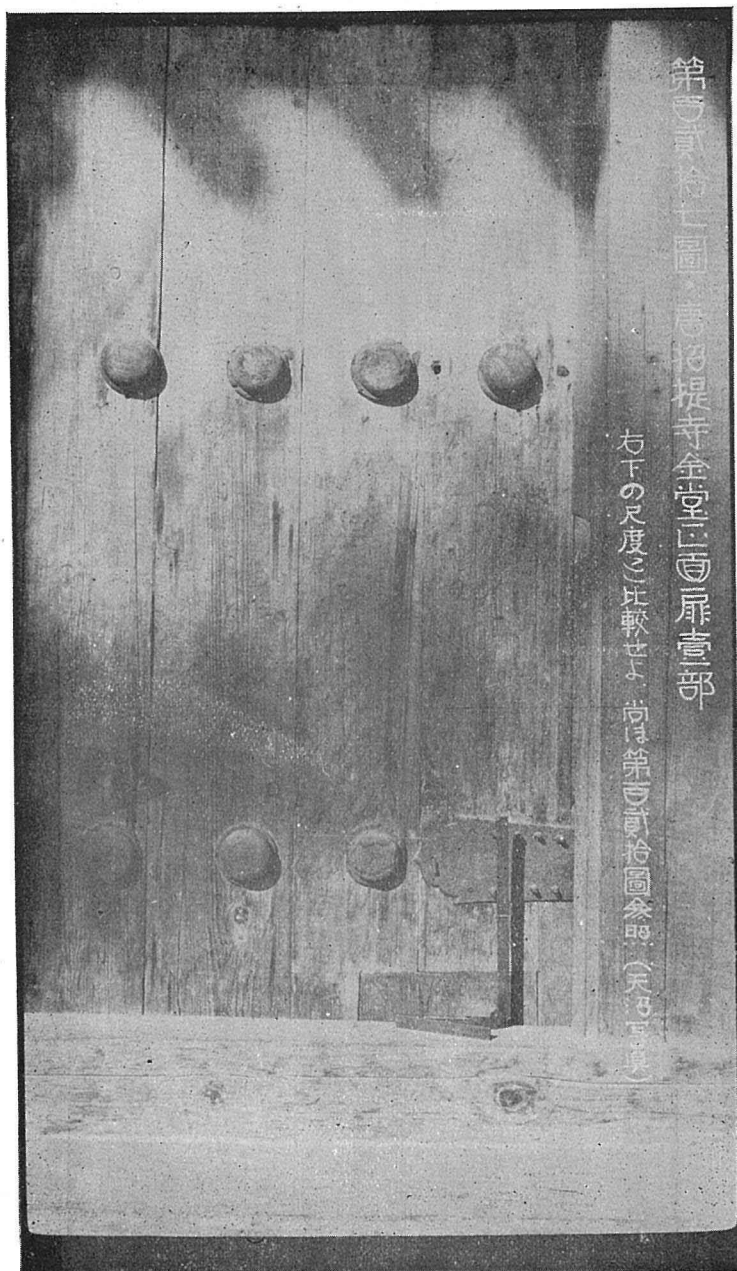
研究の槩

日本古建築研究の槩

第四號

一一一(六一五)

(天沼写真)



第百廿拾七圖 唐招提寺金堂に面する扉壹部

右下の尺度と比較せよ 尚ほ第百廿拾圖参照 (天弓五尺)

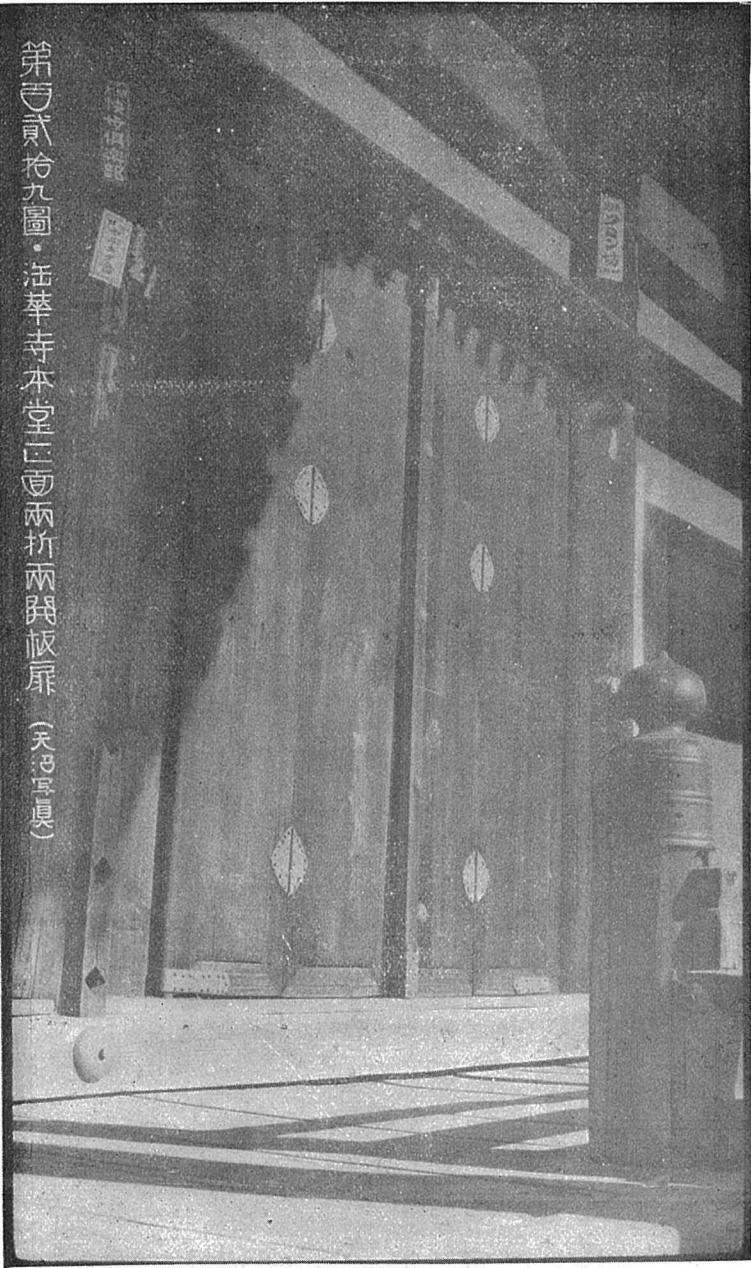
第百貳拾八圖・法隆寺

夢殿南側扉壹部 (天智遺真)



第十一卷 研究の葉 日本古建築研究の葉

第四號 一一三 (六一七)



第百貳拾九圖・法華寺本堂正面兩折兩開板扉 (天沼写真)

には附近に——遠方ではいくらい、木材があつても運搬に手数がかゝるから、いづれ近いところの間に合はせたのであらう——檜の大木があつたに違ひないと思はれる、だから充分手が行届いてかゝる立派なものを割合に易く得ることが出来たのであらう。

又其面を他の時代に於けるものゝ如く飾金具を以て裝飾することはなかつたらしい。法隆寺堂塔のは何れも何一つ打つけてない、即ち「饅頭金物」も「八双」も打たなかつたのである。

尤も玉蟲厨子宮殿の夫れは、あんな小さなものでありながら切り放しの一枚板ではない、上下に「端喰」が入つてゐる。「端喰」といふのは、例へば本箱の蓋の上下に入つてゐる様な横木の名稱である。かゝる様式の扉は奈良時代以降各時代に於いてみる所である。高さと巾とが僅に夫れ夫れ^{1.095}と^{1.455}(今の曲尺)の小さな扉にまで端喰を入れてある

のから考へると、此の時代の他の堂塔の夫れには何れも端喰があり、偶ま法隆寺の丈けが特別入念に、左様なものを入れずに仕上げてあるのかも知れぬが、併しこれは總て他の當代の建物が亡びた今日、若しくは僅に残存せる法起・法輪兩寺の三重塔の扉が、最早當初のものでない今日からは、到底當初の真相は判らぬのである。

今更事新しく記す迄もない、誰れでも知つてゐる通り、玉蟲厨子は全體漆塗の工藝品である、だからいくら堅地でやつても萬一仕上げた後に少しでも狂ひが來た場合には甚だ工合が悪い、まして扉の様な薄いものは、絶對に反つたり振れたりしてはならぬ。而も扉が蝶番で吊つてある以上、尙更狂つては困る。此れを避るためには端喰を入れておくに限る、だからこれは小さなものであるにも係らず用心をしたのであらう。さうすると、一二を除くほか當代のものが残つて居らぬ現在にあ

りては、末期に於いてはとにかく、盛時のものは何れも切り放しであつたとしてもよくはあるまいか、そこでこの時代のは

扉は一枚板より成り、上下端は切り放しとす。

軸は柄を造り出し、上下の長押の夫れ夫れ下端及上端に穿てる孔に入れて吊込み、其面には飾金具を用ひなかつた。(但し末期に近いものは上下端に端喰を入れたかも知れない)。

としておいてよからう。さうして工藝品にありては、扉に端喰を入れ、また蝶番で吊込んだといふことを忘れずにゐればよろしいのである。

併し乍らこゝに一つ斷つておかねばならぬ事がある。夫れは法隆寺中門及び歩廊の板扉についてである。双方共何れも數枚の板を合せ、上下には端喰が入れてあるが、これ等の扉は勿論當初のものではない、けれども當初からかうであつたが、或は當初は金堂や塔の、如く切放しの一枚板であ

つたのが、後に今の様になつたのか、何れであるか明らかでない。

中門や歩廊は、金堂や塔に比べれば、いふ迄もなく重要な度に於いて差があるのである。だから何も骨を折つて一枚板にせぬでも、最重要のさへさうしておけば、この方は寄せ集め板の端喰入で澤山であらう。つまらぬ所へ金をかけて無駄なことをせぬでもいゝ。賢明な昔しの建築家はそんなつまらぬ事は必ずしなかつたに違ひない。

併し或はこれ等は現代の平凡な頭から割り出した考へで、當時は材料も豊富であつたし、左程儉約せぬでもよかつたらう、其上物が物だから、多分同じ様な一枚板を用ひたが、後世修補の際——事實これ等の扉の材料は新しい——に今みる様なものに變へたのであらう。といふのも一つの考へ方である。何れにしても今日からは確かなことは判らぬ。

奈良時代

前期に於いても尙且板扉であつたらしい、といふのは同じく法隆寺金堂及五重塔裳層の夫れをみると、何れも板から成つてゐるからである。

併しながら其様式は前代のと幾分異り、金堂のに於いては其面に蓮座を有せる饅頭型の金銅飾金具を四列四行に打つけ、且つ其上の方には連子窓を設けてあるから、飛鳥のに比べると大分に賑かで且つ立派である、而もこの連子窓はまことに手数のかゝつた仕事をしたもので、九本の連子は何れも後世の夫れの如く、別の木を削つて上下の框に嵌め入れたのではなく、扉から削り出したのである。たゞ上方の端喰丈けが、上の方から嵌め込んである丈けである。五重塔の分は、連子の間が金堂のゝ様にすいてはゐず、恰も西洋洗濯板の如く接著してゐる上に、両面から押しつぶした様に扁平な感がある、其つぶれた洗濯板はやはり刻み

出しになつてゐる。

他の例は薬師寺東塔裳層の扉で、法隆寺のに比べると大分粗末であるが、これも亦同じく板扉である(第九十圖)。たゞ彼は大變に立派な建物であるから扉も入念に製作したのであらう、夫れに比べるに此れはさう立派にする必要もなかつたせいもあらう、甚だ簡單である。尤もこの扉は當初のものではなくて、初めは立派であつたのを後にかうしたのかも知れぬが、遺物に乏しい今日、姑くこの板扉を以て當初の式を踏襲したものと考へておく。

他には遺物がないから、以上の他に種類があつたか否か判らぬ。前代に玉蟲厨子を引合ひ出した如く、當代では橘夫人厨子の例によると、彌陀三尊の龕の扉は、端喰附の板扉で蝶番で吊込んである。また海龍王寺五重小塔には、扉が一枚も残つてゐぬから判らぬが、もしあつたら勿論板扉であつたらうし、さうしてやはり蝶番で吊つてあつた

に違ひない、なせなら方立に蝶番を打ちつけたあとが残つてゐるからである。

同後期、また前期と大差ないが、遺物からいふと三種位を舉げることが出来る。

最初に舉ぐる例は飛鳥時代に逆戻りをした様な切り放し端喰なしの板扉で、榮山寺八角圓堂のが夫れである。しかし此の例に於いては、扉の召合せは中央になくて、少しく一方によつてゐる、さうして片方の扉から召合せのところに四角な部分^(第百二十圖)が刻み出してある。これはおそろしく材料が徒になるので、これ丈けのものを一枚板からつくり出すためには、殆んど倍の厚さの木が必要である。其上にそれを薄くするため、手間も随分にかゝる。尤も斯様な仕事をしてゐるのは、先年たゞ一所に残つてゐた丈けで、あとはいゝ加減な扉が釣込んであつたのを、大正の初めに大修理をした時に、この唯一枚残つてゐた扉に倣ひ、あと

の三箇所の出入口のをとりかへたから、今では一見皆かうなつてゐる様に見えるが、今のは中央の四角なところは一枚板からくり出しては無い、かやうな手間のかゝる無駄な仕事は昔しでなくては出来かねる、だから此の部分は四角な木を削つて打ちつけてあるのである。何れにしてもこの種は當代に於ける最も簡單な扉の例である。

次は板扉に飾金具を打つたもので、唐招提寺金堂のゝ様なのが即ち夫れである。此れは第百二十圖^(一)及第百二十七圖に示した通りの饅頭型で、木製漆箔であるから、ほんとうは金具ではなくて「木具」である。例へ金属製であつてもさうだが、殊に木製ではたゞ飾りになる丈けで、全く以てこけ威に過ぎぬのである。其上に「八双」もあるが、これは立派に金銅である。さうして扉其物は板を合せて裏には適當の間隔に棧を打つてあり、上下の八双は裏にもまわつて其部の棧にとりつけてあ

るから、如何にも外觀は丈夫さうに見える(第②圖)。

法隆寺西院經藏階上東側の扉は、高^{4.47}×巾^{4.08}×厚²²⁺で、下方に二列八行に合計十六個の饅頭型金銅飾金具を打ち、上の方には同じく洗濯板式の連子窓が刻んであるが、扉の其部を少しくほり込み、其板から連子が繰り出してあるから、金堂裳層の夫れの如く間が離れてゐるけれども、間はつまつてゐる、だから丁度洗濯板の鋸齒型のところを少しづつ間を離れたやうなものである。尙ほこの扉は當初からこのであつたかどうか疑問であるのみならず、下方を切斷してこゝに用ひたものゝ如く、その召合せのところは、たとつてをよくするためか相缺きにしてある。こんな扉を相缺きにした例は、あるのかも知れぬが私はついこれまで餘り見たことがない。第百二十六圖に其一部を寫眞に出しておいたから就て觀られ度い。

此の種の板扉では、法隆寺綱封藏内のに類例が

あつて、これには金銅饅頭型の飾金具が打つてある(第百②圖)。以上の數例からみると、斯様な金具を打つたのば、當代には相當にあつたのであらうと思はれる。

創立當時の東大寺大佛殿の扉も亦縦に澤山の割合に巾の狭い板を接ぎ、其面に金銅飾金具を打つたものであつた。其圖は信貴山繪縁起をみればかいてある。

要するに奈良時代の扉は前後期を通じて、次の様にしておけばよからう、即ち

板扉で、一枚板の時と、二枚以上、場合によりては多くの板を接ぎ合せて造り、また上下端は「切り放し」のと「端喰」を入れたのとあり、板には厚いのも薄いのもある。時には裏面に適當の間隔に棧を打つ。表面は各種の飾金具又は類似のもので飾ることもある。上部に連子窓をつくる時は、其連子が連續せると相當の間隔に配置

されたのである。木部丹、連子緑青塗。
平安時代

に入つても別に變つたものも出來ず、前代の繼承であつたと思はれる。殊に扉に金具を打つといふことは、扉其物を立派に且つ丈夫に見せるから、これは大分人氣があつたらしく、ずつと後世迄も行はれた。

前期の例は室生寺にある丈けであるが、塔のは板扉で何れも「端喰」及「定規縁」がついてゐる。これは當初のものであつたかどうか、今記憶して居らぬ。同寺金堂正面禮堂中央三間のは新しい、後面中央の間のもいけない。内外障境兩端の間のも同様であつたと思ふ。元來あの堂は當初五間四面入母屋造であつた時は、今の正面の如く中央三間が板扉で兩端は連子であつた事は想像に難くない、寛文年間に禮堂を附加したとき、今の如く中三間を格子とし、兩端の間に板扉を吊込んで出入口と

したものと思ふ。其時に古い戸を何れもよして新しいのとどりかへたのではあるまいか。さうすると此の期の扉は、どうであつたか判りかねる。たゞ端喰を入れた定規縁のある板扉であつたらうと思ふ丈けである。五重塔のは或は古いのではなかつたかと思ふから、今は夫れによりかう想像をしたのである。

後期のは方々にあるが、先づ實例を鳳凰堂の扉にとることにする。鳳凰堂の正面三箇所の扉は、何れも表面に六葉座の金銅飾金具と八双金物とを打ち、裏面には有名な繪が描いてあるから、開いても閉ぢても甚だ美事である(第百二十)。但しこれは斷面圖でみる通り、兩面から板を打ちつけてこしらへてあるから、いはゞ張子である、かうすれば材料は少なくすむが、これは木材儉約のためにしたと解釋してはよくない。あれ丈けの善美を盡した建物に、扉の材料丈けを儉約する筈はない。

あれはかうした方が扉自身は軽くなるし、また狂ひも少なくなるし、其上閉づれば一枚板で造つたと同じで、飾金具で立派に見える。裏には繪を描くのだから、若し板が割れたりしては體裁も悪い。あの様にしてつくつておけば、さういふ心配は全く無用である、だから世が進むに従ひ漸々巧者になり、あゝいふものを造る様になつたのであらう。

法界寺阿彌陀堂のでも、やはりさうであつたと思はれる。此の堂は正面何れも蔀格子で、今では中央の間もさうなつてゐるが、以前は少なくともこの部分だけは板扉が吊込んであつたのである。理由は今でも此の部分の上長押の下端に、軸摺の孔が二つあいてゐるからである。上に丈け孔があつて、下の二重長押の上端にはないが、これは扉が亡くなつてから、何回か入口のところは修理をされたため、再び扉をつけぬ以上、全く必要のない孔を省いて了つたのであらう。斯様な實例はこ

れのみではなく、まだ他にもある。現在此の堂の側面や背面にある板扉には何等の裝飾もないが、これは場所が場所だから多分かう簡單にしたので若し正面のが残つてゐたら、これ丈けは恐らく鳳凰堂式、即ち前代式で必ずや飾金具を以て裝飾してあつたと思はれるのである。併し彼れの如く此れ亦兩面から板を打ちつけた張子であつたか、或は招提寺金堂の様なのであつたかは判らぬ。

當代には一方斯様な立派なのがあると同時に何の飾りもない至極簡單なのがあつたが、「定規縁」は完全に發達をしたらしい。この「定規縁」といふのは、扉の召合せのどこを體裁をよくするため、兩開板扉の一方の遊離端の全長に沿ひて縦に打つた木の名で、多くは巾の廣い面をとり、普通其面を除いた部分に、適當の間隔に四葉又は六葉を飾りに打つたものである(第百二十圖)。

即ち前代に於いてはまだ原始状態にあつて、甚

だ形式的であつたもの——繁山寺八角圓堂扉(第二十圖)の如き——が當代になつては裝飾を兼ねた實用的のものに進化したのである。而もこの様になつてからは、最早一枚板から刻み出す様なことはしない、別につくつて打ちつけてゐる。實例は同じくこの阿彌陀堂にある。第二百一圖(三)に掲げたのは富貴寺大堂ので、これは今を距る十五年許り以前に修理をした頃に、文部省宗敎局に於いて作製された圖面に據り、全部復原して吊込んだのであるから、材料は極く新しいが、様式は平安時代のを參考して出來たのだから古しの型をよくあらはしてゐる。

或はまた扉全部を漆箔で金色とし、上下に二枚づゝ重ねて金銅の八双金物を打つた中尊寺金色堂の夫れの如きは、全體が表も裏も金色燦爛たるものであつたが、これなどは極端な贅澤扉といへるであらう。

可なり有名な白水阿彌陀堂(福島縣石城郡内郷村)の正面中の間には、兩折兩開板扉が吊り込んである。私はこの扉が當初のものであつたかどうか記憶がない。當初のものであらば問題はないが、さうでないとする或は先年修理の際に在來の型に倣つて新造したのか、或は全然失はれて臨時の扉で間に合せてあつたのを、大概かうであつたらうと想像して復原したものか、何れかであらう。此の堂に於いては柱の間が相當に廣いから、兩折にでもしなければ扉は甚だ不格好なものになつてしまふから假に材料は新しくとも、當初からかうであつたとしてよからう。さうすると兩折は少なくともこの時代からあつたとしていゝことになる。

つまり當代の扉は一口にいふと

板扉は常に上下端に端喰を入れ、定規縁は完全に發達し、其部に裝飾として四葉又は六葉を打つたのもあつた。また兩面より板を張り、表面

は六葉座の金銅飾金具及び八双、裏面は極彩色で裝飾畫を描いたもの、或は全部漆箔を施したのももあつた。兩折兩開板扉はこの時代から出來たのであらう。

といふことにならう。

尤も扉の召合せのところに打つ定規縁については、以上記した通り奈良時代に其原始的のもものがあつたが、發達したのは平安と思ふ。奈良時代のもので現存してゐるのもつい未だ見た事がない。然るに『建築字彙』には定規縁の欄に

……天平寶字年間の古文書ニ「戸膝一枝」トアリ
廣五寸厚二寸ノ木ニシテ即チ東大寺扉ノ定規縁ナリ。其膝ハ牒に同ジ。和名抄ニハ鏝字を用ヒアリ。

とある。天平寶字年間の古文書とばかりで月日が判らないし、著者たる中村博士はごこで見られたかも知れぬが、私は『大日本古文書』の天平寶字の

部分を丹念に調べたところ、同六年二月三十日、『山作所解 申二月告朔事』のうち

戸鏝一枝 長一丈四尺 廣五寸 厚二寸

工一人 (『大日本古文書』第五第一一六頁)

とあつたから、多分これであらう、「膝」と「牒」とは同じ字で共に「テフ」、「鏝」も同じ發音もあるが、漢字としての意味は全く異なるのである。『古事類苑』居處部十八戸の部に

〔倭名類聚抄十戸具〕戸鏝 唐韻云、鏝式涉反、與葉同、楊氏漢語抄云、

戸乃銅鏝也 帖木

〔箋注倭名類聚抄三門具〕按廣韻云、鏝與涉切、

與葉同音、說文、徐音同、此云式涉反者、葉又有式涉切音、蓋因之而誤也、戸帖木、施扇旁、所以蔽塞兩扉之隙者、太神宮式、牒釘覆金者、謂覆著牒於扉釘痕之飾也、今被障子、猶有帖木板、……唐韻同、說文、鏝鏝也、鏝、鏝也、徐鍇曰、今言鐵葉也、正字通云、鏝鏝

互訓、未詳、一説銅鐵椎鍊成片者曰鏢、如甲制一葉爲一札之類、按説文、葉、葉薄也、凡從葉字、皆扁薄之義、如葉葉牒牒僕皆是、則徐氏鐵葉、廖氏銅鐵椎鍊成片之説、並可從、

但以鏢爲戸帖木者、恐非漢名、

とある。戸鏢の鏢の字の意味がどうあらうとも、支那の名でなからうと、とにかく日本では「定規縁」の意に用ひられたのである。「戸乃帖木」とあるからである。

そこで戸牒を定規縁とすると、 $14.0 \times 0.5 \times 0.2$ では巾や厚に對して長過ぎはせぬか、併しその少し先きの方に

戸牒一枝 長一丈四尺
戸二具料

とあるので見ると、二つ切にして用ひたものらしく思はれる。この方は巾さと厚さはないが、長さ
は前のご同じである。前のも扉二枚分と假定し、
二つ切にすると丁度 Proportion がよくなるやうで

ある。だから假にさうときめると、奈良時代のもも、平安以降のもの、即ち我々が常に見馴れてゐるものと同じ様な割合であつたと考へてよささうである。

ところが奈良興福寺東金堂の扉についてゐる定規縁は、材料は扉其物より新しい様に思ふが、大さは 185×495 、即ち約廣五寸厚二寸である、長さは
ついで測定したことがなくて目分量ではあるが、ざつと十二三尺(こゝによつた
ら十四尺?)位あるやうに思ふ、さうすると前の分は扉一枚のであつたかも知れぬし、また現在東金堂の分でも、さう大して薄過るとも細過るとも思はぬ、あれでも恰好がとれてゐる、してみるとあれは猶且扉一枚分であつたのかも知れない。小さなことではあるが、尙將來よく調べてみて、若し間違つてゐることに氣がついたら、後に訂正するであらう。

何れにしてもこれを定規縁とすると、奈良時代

に於いて既に完全な打つけたのがあつた證となし得るが、たゞ此の文書のうちの二所に擧げてある丈けだし、ごうも未だ腑に落ちぬから、充分にのみ込める迄は、あるにはあつたが、さう澤山にはなかつたらしいから、立派なのが出來て廣く用ひられ出したのは、平安時代からとしておく。

鎌倉時代

前代と大差ない。即ち其表面に若干の距離間隔に、規則正しく金銅飾金具を打つたものと、定規縁に丈け金銅又は鐵製の四葉等を打ち、其表面には「八双」又は「散八双」を打つた丈けのがあつた、さうして前者の場合には普通定規縁なく、後者にありては大概定規縁があつたのである(第百二十二及第百二十三圖參)。八双金物にもまた金銅と鐵製とあり、散八双が金銅の場合には、其面に蓮花唐草などを毛彫にしたのもあつた。尤もさういふのは、厨子の扉などに多いのである。

尙ほまた兩折兩開の場合には、吊元の扉と手先の夫れとの間には蝶番を打つが、其蝶番には時代の特徵をよく現はしたくり形がつけてあり、猪の目の形またさうである。實例は法隆寺聖靈院内陣の厨子及び同寺新堂正面と北側面の扉とにある、前者の場合は金銅製で其面に蓮唐草を毛彫にしてあり、後者は外側だから鐵製で、且つ其面には別段何も飾りはない。

第百二十二圖①・②は、海住山寺(京都府相樂郡瓶原(レイヘイ)ラムラ大字例)五重塔の内陣扉である。三重塔や五重塔に於いては、一度でも内部をみた者は誰れでも知つてゐる筈だが、初重には四本の柱——これを「四天柱」(シテン)といふ——が遊離してたつてゐる。さうして其柱で圍まれたところ即ち内陣、又は柱一ぱいに佛壇を設ける。だから内陣柱に當るこの四天柱は、勿論構造上大に必要であるが、同時に佛壇を設けるために利用され、殊に後方の二

本の柱の間には、檼が二重目で終つてゐる場合、例へば後世の三重塔等（ありては、殆んど常に壁をつくり、夫れに佛壇を接して造つてあるのである）。

五重塔にあつては、檼は殆んど總ての場合に初重を貫いてゐる。其意は、中央の大礎石の上に立つてゐるか、又は近世の夫れの如く四重目から懸垂してある場合にも、下には礎があつて、檼の下は納の様にしてあり、其礎の中心に穿たれたる小さい凹所に向つてゐる。だから大概の場合には、四方へ四佛（往昔は釋迦の一代記、塔二基の際に東塔に因相西塔に果相）を安置してある。さうして勿論柱の間は開放しにしてある。

然るに此の塔に於いては、四天柱の間に四方共「幣軸（後）」（後）や方立（後）を取つて、立派な板扉を吊込んであるのみならず、下方長押下の部は羽目板に横連子を入れてある。即ち四天柱で取り圍んだ部分を厨子の如くに取扱つたのである。内部には當初か

らさうであつたかどうか判らぬが、今は大日如來の坐像一軀を安置してある、而して扉の裏面には佛畫、厨子の内部は柱・方立・長押・無目等、隨所極彩色を以て唐草や幾何學模様を描いてあるが、其文様のうちには甚だ珍らしい、例へば大和吉野の廢世尊寺鐘——俗に三郎の鐘といふ——上帯にある一種の唐草の系統と思はるゝ、泰西の古建築其他に盛に用ひられたる Acanthus 唐草の様なのが描いてあるのは、特に注目し値する。

餘りに厨子の内部が立派なので、つい横道へ入り過ぎたが、元へ歸つて扱て斯様に四天柱へ扉をとりつけて、其内へ佛像をまつり、まるで厨子の様にしたのは、近江大津の園城寺（三非）三重塔の初重内部に於いてみたほか、私はつい類例を知らぬ。いつ迄たつても相不變見聞が狭く、他にあるとか無いとか珍らしいとかさうでもないとか、何とかいひきることが出來かねるが、其うち心懸け

て調べておくつもりである。

第百二十二圖には、平面圖を略してしまつたから判らぬが、扉は事實四方についてゐる、さうして上下に長坤があり、上長坤の上は直に小組格天井であり、扇の内部は佛壇になつてゐる。扉は外面に六葉座のついた金銅飾金具を四列三行に、上下の列は吊元に近い一個を省いて、其部に八双を打つてある。同圖④は丁度西側ので、こゝで外から締をする様に樞カギと鍵孔(其座がれの形に注意せよ。同圖⑤参照)とがあることが判らう。裏面には八双がまはつてゐるほか、手先の上下部及中央に必要な金具が打つてある丈けである(同圖⑥及⑦)。扉の厚さは僅に11であるのからみても、其表面の六葉座の飾金具(⑧・⑨)が全くの裝飾で、實用の點からいへば、あつてもなくても同じことであることが知れる。

尙ほこの扉は鳳凰堂の系統、即ち唐招提寺金堂の系統、もう一つ前では法隆寺金堂及塔婆裳層の

夫れの系統であることは、第百十九圖以下を比較してみる迄もなく、最も明瞭なことである。即ち奈良時代前期からずつと筋を引いてゐるので、たゞ平安以降六葉座がついた丈けのことである。

法隆寺夢殿の西及南側の扉には、表裏共に珍らしいことに七葉座の金具が打つてある(第百二十八圖扉の表面の一部である。東側北側との夫れには鐵製八双の他飾金具なし。尙ほ七葉座金具の圖は後出)。これも皆七葉座である。六葉か八葉にすれば造るのに樂であるのに、何の理由で七葉にしたのかと多少氣にならなくもない。表面の形は圖に明らかであるが、裏面のは圓く平たく薄くて少し膨てゐる。故に表裏で大分に差があり、従て其區別は明瞭で、開閉により感じは大分に異なるのである。扉は三枚の板を接ぎ、且つ上下に端喰が入れてあるが、材料は總て當代のものと思ふ。これは敢て創建當時の式を模したとせぬでも、當代に於ける大修理に際して、既に失はれてゐた扉を此の時の式

で新しく造つたとしてもよからう。

第百二十三圖は扉の召合せに定規縁を打つた一例である。前代に屬するのでは法界寺阿彌陀堂に吊込んである扉がこの種であるから、即ちあの系統である。この場合にはたゞ定規縁へ鐵製の四葉を適當の距離に打ちつけた丈りで、また八双も前圖のと異なり、先端が魚の尾の様に二つになつてゐる(第百二十三圖及㉔の下圖参照)。尙ほ八双金物のことについては、後に「飾金具」の欄に於いて述べることにし、こゝでは斯様な金具に先が尖つたのと開いたのと二種類あることに注意する丈けに止めておく。

又當代には「散八双」を打つた例もある。散八双といふのは第百二十四圖の如く、多くは扉の四隅に一種の輪廓を持つた略三角形の金具を打つので外部の場合には多く鐵製であるが、内部殊に厨子の扉等にありては、間々金銅で其面に蓮唐草を毛彫にしたりしてゐる、さうして輪廓の曲線もしつか

りしてゐるのがある。法隆寺夢殿の扉にも打つたあとが高くなつて残つてゐるが、夫れによると頗る簡單であつたけれども、形は非常によかつたことが判る。また高野山に於ける名建築、といふよりも寧ろ我國に於ける和様建築の大傑作の一たる不動堂の扉にも、四隅に鐵製のいゝ形のが打つてある(後)。内部の實例では法隆寺聖靈院厨子の扉三個所共、吊元の扉の軸摺に近いところに、金銅で何れも其面に蓮華唐草を毛彫にしたのが打ちつけである。故に當代のは

前代の繼承で、其面に適當なる距離間隔に飾金具を打つたのと然らざるのである。而して何れも八双金物が伴つてゐる。八双には普通のものど散どの二種があつて、この二種は同時に用ひらるゝことはない。扉面全體に飾金具を打つた時には定規縁を用ひぬが、さうでない場合には多くこれを用ひ。定規縁には必ず面を取り、上

に多くの場合鐵又は金銅の飾金具を打つ。一枚板の扉は殆んどなく、多くは數枚の板を接ぎ合せ、上下端に端喰を入れてある。

位のところではどうであらうか。

*法隆寺東院夢殿の、少なくとも西側及南側の扉には、散八双を打つたのであるが、今は何れもとれて亡い。これは其部に金具のかたき釘孔が殘つてゐるから明らかである。さうして其上に八双がある。八双はまづい形で且つ鐵製ではあるが、これは今でもある。この八双は、既に亡くなつた散八双が同時に存在したか否か問題である。若し同時に存在したのであるとすると、右に記したことは誤りとなる。併し既に散八双が失はれてしまつた後に、鐵製八双を打つたのだとすると、差支はないことになる。どうもつい餘り氣をさめなかつたので、双方併用の例が他にあるか否か知らぬ。若しあつたら其時取消すとして、夫れ迄は「併用せられたことはない」として置く。

室町時代

大概室町は鎌倉の踏襲であるから、前代と略同じであるが、扉面六葉座の飾金具は、主として復古建築に用ひられたものゝ如く、興福寺東金堂に實例が殘つてある(圖後)。あれには一面六列五行に

合計三十個の金具が打つてあつたのであるが、珍らしいことには扉の兩面に同じものが同じ様に同敷打つてあるから、開いても閉ても同じ様な外觀を呈してゐた筈である。いゝ考へではあるが、裏も表も全く同じく、これでは表裏の區別がつかねる。前代のところで記した夢殿の扉の飾金具の様に、類似の形をしたのを表裏に打つことが、鎌倉にあつた以上、當代にあるのは當然で、其上に此の場合には表裏共同じものを同じに並べたのだから、一層進歩したともいへるが、同時に退歩即ち墮落したといへる。ある物體の表面も裏面も全く同一の裝飾法を採用するなんかは能がなさ過ぎる。多少の區別はつけるべきであらう。扉は正面

三個所六枚のうち南より北へ順に表と裏とに

表五、表一〇、表〇、表〇、表一五、表〇
裏七、裏三、裏三、裏一、裏八、裏〇

だけ金具が殘つてゐる。完全なら合計360あるべきものが、僅に52あるのみで、308は完全に盜まれて

しまつたのである、これ以上は盜まれぬ様に何とかせねばなるまい。

復古建築のうちでも、喜光寺金堂の扉の如きは、鐵製の八双が用ひてある丈で、而も珍らしく一枚板で、面に整列してゐる金具は一つもない。だから同じ復古建築でありながら、前者にあつて後者にはないところをみると、主として用ひられたらしいといふのが少し怪しくなるが、どうも其他に餘り例を知らぬから、止むを得ずさう書いたのである。要するに當代になつてからは、堂塔の板扉に金具を行列させることは大分墮落し從て廢れたらしいのである。

尤も門の扉には相不變相當にこの方法が用ひられてゐたらうと思はれるが、今心當りが無い。夫れに引かへ、定規縁を打つた聖靈院式のは可なりあつたのである、即ち同じ和様の扉でも、金具の行列をやめて、さつぱりした式が流行しだしたと

見られる。これ一面に於いては、棧唐戸が盛に用ひられたからであらうが、また考へやうによつては、奈良時代初期以來、支那直寫の金具行列式から漸くこの時代になつて脱離することが出來たのだともいへやう。故に

當代も亦前代の繼承であるが、金具を縦横に整列せしめて裝飾することは漸く衰へたやうである。

といふことに歸着するであらう。序ながら支那では今日でも門扉などには常にこの此の飾金具を用ひてゐる、夫れが大概は九列九行即ち八十一個整列してゐるから、甚だ美事である。柱の胴張・地圓飛角の二重軒・隅の扇極・眞反り等と同じく、門扉の饅頭金具も我國では早くすたつて了ひ、此れに代るに四葉等を以てする様になつたのではあるまいか。

桃山時代

になると、棧唐戸が全盛となり、従て板扉は余り振はない。兩折兩開板扇の用ひられてゐる一例を擧げると、大和の法華寺本堂(第百二)である。門の扉には相當に使用されてゐる、さうしてこけ威の爲めに、金具を面に行列させてある場合には、六葉座へ球の様に膨れ上つたものを打つのではなくて、純然たる四葉になつてしまつたのである。夫れが其まゝ、

江戸時代

に移行してゐる。第百二十五圖は奈良市官幣大社春日神社南廻廊の梅門——正面入口の樓門に向て右即ち東方復廊の中央にある小門——の扉であるが、鐵製の四葉を圖の如くに並べ、裏面は其部に横棧があり、且つ棧の上から同じく鐵製の鍔頭鐵物を打ち、表面の四葉の脚をかくしてゐる。いふ迄もなく此の場合に限らず、四葉はたゞ座に過ぎぬので、其の中心に飛び出してゐる「樽の口」(一に花蓋)

がほんどうの釘の頭なのである。

此の四葉は、上等なものになると、金銅又は煮黒目(ニクロメぞよ。銅の合金)のものもある。或はまた第百二十六圖の如く、立派に見せるために散八双を一枚につき六所、兩折のため扉の間に裝飾附蝶番三所打つたから、一枚の黒漆塗の扉は九個所で全色燦爛と輝き、洵に將軍の威光に相應しいものであつた。

また片開の板扉におそろしく贅澤なのが、日光東照宮の拜殿に用ひられてゐる。全體黒漆塗で、其上に私草が金蒔繪でかいてある、さうして繪に妨げにならぬ様に、これも一面に唐草を彫刻した「散八双」が四隅と中央、即ち六個所に打つてあるから、見たところまことに立派なものである。この種の扉は本殿にもある。また大猷院にも蒔繪はないが黒漆塗のが用ひてある。

桃山江戸時代を通じての板扉は

面に打つ飾金具は、多く鐵製四葉であるが、扉

を朱或は黒漆にて塗り、金銅又は煮黒目のを打つこともある。また散八双も扉の四隅丈けでなく、吊元及手先の中央にも用ふる様になつた。

棧唐戸の流行に反し、割合に單純な板扉は餘り賞用されなかつたが、時には黒漆塗金蒔繪又は黒漆塗で、金銅八双或は八双金物を打つたもの等もあつた。

のである。要するに全時代を通じて餘り變つた式は出なかつたのである。

今回は鎌倉以後の棧唐戸に就て述べるが、この方は後世になると甚だ複雑な且つ贅澤なものが出來だしたから、板唐戸程簡單にはいかない。

(大正十五年六月三十日稿了・水曜・曇)

追加。前號に記した留蓋の二例を追加をしておく。一つは磁賀縣膳所町の膳所神社の門ので、伏鉢型の瓦製の留蓋の中央に、御幣がさしてある。御幣は下からみた丈げだから、間違つてお

るかも知れぬが、一面に銚てぬたから、どうも鐵葉か何かでこしらへてあるのではあるまいかと思はれる。この場合、この御幣は全くの飾りで、何の役にもたつてはゐないが、珍らしい留蓋といへやう。他はずつと遠方だが、東北本線宇都宮驛の停車場の入口の上にあるもので、一間一面の入口が突き出てゐるが其屋根の兩端には車輪の形をつけた留蓋が用ひてある。今の東北本線は元々は日本鐵道株式會社の線路であつたので、この會社の紋章は鐵道に用ふる車輪であつた。だから留蓋へも當時の汽艇車・客車・貨物車の横腹へつけたと同じ紋章をつけて、大に社運の隆盛を見せつけたのであらう。誰れの頭から出たのか知らぬが、まことにいゝ考へであつた。ところが星移り物換り今では政府の所有になつてしまつたが、夫れでも尙ほ留蓋に昔しの會社時代の紋章を残してゐるのは床しいことである。而も一寸よく出來てゐるから、中々よく見える。獅子の逆立ては月並ではじまらないが、かうなるさたゞ一つの留蓋にも相當に意義があるのだから面白い。